

高坂節三著「教育委員になって知ったこと、考えたことト」

小学館スクエア 2010年6月10日刊を読む

歴史に学ぶ - 江戸時代の教育 -

1. 「もし文明という言葉が物質文明を指すなら、日本人はきわめて文明化されていると答えられるであろう。なぜなら日本人は、工芸品において蒸気機関車を使わずに達することのできる最高の完成度に達しているからである。それに教育はヨーロッパの文明国家以上に行き渡っている。シナをも含めてアジアの他の国では女たちが完全な無知のなかに放置されているのに対して、日本では、男も女もみな仮名と漢字で読み書きができる」と、幕末に江戸を訪れたハインリッヒ・シュリーマンは、その著『シュリーマン旅行記 清国・日本』の中で、日本の教育がヨーロッパの文明国家以上に行き渡っていることに注目しています。それでは、シュリーマンが注目した江戸の教育とはどんなものであったのでしょうか。
2. 「日本人の芸術的・美的な心性は、遠く奈良・平安の時代にその源を発する。また、日本人の宗教的・道徳的心性は、鎌倉・戦国の時代にかけて形成された。しかし、それらの素材を一つの枠にはめ、一つの型に鑄造したのが徳川時代(江戸時代)だからである。しかもそれには、二つの重要な要因が作用していた。集権的封建制という形で、日本が一つにまとまり、封建的な身分制度を確立したことが、その一つである。他の一つは、鎖国という政策によって、孤島日本が世界から隔離され、それによって日本的なものが外国文化の影響をほとんど受けず、いわば日本的なるものの純粹培養がなされたということである。徳川時代をぬきにして、日本的なるものの特殊性は考えられない」(高坂正顕『近世日本の人間尊重の思想』)
3. こうした純粹培養の中で日本の教育が、どのようにして独自の発展を遂げていったのでしょうか。士農工商の身分の固定化は、武士を頂点とする集権的封建体制の確立、それに伴う武家屋敷、職人町、商人町の集合による城下町形成という、世界に類をみない固定的な町を作ることになり、城下町に住む士工商と米を中心とする食料の生産に従事する村の農民の分離を結果し、支配する武士階級から支配される農民への指示は、文字を通じてなされる文書主義に移っていったと考えられます。江戸時代に御触書や法令などを綴じた公文書類が多く残されていることがこれを証明しています。農民はこのため読み書き能力が必要となっていたでしょうし、城下町に住む、職人(工)や商人(商)は町民として武士との連絡、農民との連絡のために読み書き能力が必要とされ、それに加えて、領主への年貢納入のためにも高度な数学能力を要請されたと思われます。
4. 人づくり、教育の仕方については、兵農分離がなされ、支配層である武士と、農工商に属する人たちの違いを前提としてすすめられました。武士の子弟は藩校に学び、農工商の人たちは寺子屋で学んだのです。「名君」と称せられた藩主は例外なしに教育に取り組んで、藩校の充実に力を注ぎ、儒学を中心に心の教育を発展させていきましたし、その結果、18世紀後半には藩校の設置は中小の藩にまで広がり、その数は総計で250を超えるに至ったといわれています。他方、町人のため

の寺子屋(寺子屋という言い方は上方に限られた言い方で、全国的にみれば、手習い指南をする所という意味の手習い塾)も石田梅岩やその弟子手島堵庵の努力で全国に広がっていきました。高橋敏は江戸時代の教育を次のように記しています。

- 5 . 「19 世紀に入ると教育熱は一気に高まり、寺子屋が全国に誕生する。寺子屋は私立でお上の許認可はいらないし、お上も直接関与しない。寺子屋は読み書きに自信があれば身分に関係なく誰もが開業出来た。この民間の自由さが全体像をつかむことを難しくしている」(高橋敏『江戸の教育力』)
- 6 . 「筆者のフィールドワークの体験から、最盛期には少なくとも一村に一つか二つは存在したと考えられる。天保 5 年(1834 年)の総村数は 63,562 である。この数字以上の膨大な寺子屋が大小さまざまに読み書き算用熱の時代の風にあおられて生まれた」(同上)
- 7 . 規模も中味も違うとはいえ、現在の日本全国の小学校数、23633 校(平成 15 年学校基本調査)と比較るといかに多くの寺子屋が存在していたかが判るのです。明治 5 年の「学制発布」により、「邑に不学の戸なく、家に不学の人、なからしめん事を期す」という理想が、着実に達成されたのも、江戸時代の学びの実績があってこそそのことであつたでしょう。
- 8 . 寺子屋は文字通り、お寺の一部屋で僧侶による指導から始まったと言われていています。時代を経るにつれて、指導者も浪人、医師、村役人クラスの儒者が大半を占めるに至つたでしょうし、特に戦国時代が終わって、大量に失業した武士(浪人)が寺子屋の師匠になったことは想像に難くありません。戦乱の時代、個人の救済に適した仏教は、身分の固定化、秩序維持が第一に要請される時代、人倫の道を教える儒教に置き換えられました。幕府による寺院の戸籍係化、仏教の形骸化は、この流れに拍車をかけたと言われていています。
- 9 . 儒学を理論的に完成させたといわれる、京の町人・学者伊藤仁斎は、人倫よりも個人の救い求める仏・老をしりぞけ、孔子の教えをひもどき「人倫がある時は、天地が立つ。人倫がない時は、天地が立たない。およそ天下の君臣・父子・夫婦・兄弟・友人が自分から孔子の書を読み、孔子の教えにしたがわないでも、人びとは仁義を善しとし、忠孝をたつとび、君臣・父子・夫婦・兄弟・友人の人倫を失わないのは誰の力によるか。孔子の道がはだにあまねく、骨髓にしみとおり、ながく知らぬまに行われるのでなかったら、どうしてそういうことがありえよう」(『童子問』)と、人民のなかに人倫の道を行う可能性があるからだとしています。
- 10 . 仁斎が支配される側の儒学を完成させたといわれる一方、荻生徂徠は支配する側の儒学を完成させたといわれていますが、それは仁斎の道が「天地自然の道」であるのに対して、徂徠の道「先王の道」であつたこと、仁斎の「仁」が愛につながるものであつたのに対し、徂徠の「仁」は先王の造る民を安んずる礼楽刑政につながるものであつたためであると思います。
- 11 . 『養生訓』で有名な貝原益軒は、武士の出でありながら、貧窮のなかに育ち、「地行婆」という庶民の女性に養育され、博多の港町に成長して、庶民の生活を知っていました。庶民のために易しく書いた多くの訓話が大衆性を持ちえたのは、こうした経験によるものであつたと思われる。

12. 益軒にとって朱子学に教える天を、日本古来の太陽を始祖神とする神道につなげることは自然の流れであったでしょう。モラルの基礎を自然の中に見出し、自然に密着して生活し、四季の移り変わりの中に、日常生活の規制車を見ている庶民に受け入れやすいものでもありました。また学んでも、実践を結果しなければ意味がないという考えも受け入れやすかったと思います。
13. 「学問をする人は、まず誠の心を本とし、善を好んでつねに努め行い、悪を嫌ってつとめて遠ざけるのをむねとする。学んで書を読んでも、善を好まず、善を実行しなければ役に立たない」(『初学訓』)とし、さらに、
14. 「礼は未発に戒める。人の情欲のまだおこらない先に早く戒めると邪悪にいたらない。だから礼の教えは、目に見えぬところに大きな益がある。日々に善にうつり、罪に遠ざかるのを自分では意識しない。これが礼のたつとぶところである。法はすでに悪事が出てから禁ずる。その効果は目に見えるが益はすくない」(『五常訓』)
15. 「天下の建道は五、これを行うゆえんのものは三、いわく、君臣なり、父子なり、夫婦なり、昆弟なり、朋友の交わりなり。五者は天下の達道なり。知・仁・勇の三者は道德なり。これを行うゆえんのものは一なり」(同上)として、秩序の維持のためには、力によるよりも、自発的秩序を維持する行いを期待すると共に、五倫の道を実行していくのに、知・仁・勇が必要であり、それを維持する内面的な力として「誠」を強調しました。この「誠」を中心とした考えは、後に『日本道徳論』をあらわした西村茂樹に繋がる考えでもあったと思います。
16. 人はどんな社会に住もうが、次の世代に引き継ぐ作業、即ち教育が必要でしょう。鎖国と人口移動の禁止により世界から隔離された社会は、平和の時代であったと言えましょう。しかしそれは外への広がりのない社会であったために、教育のあり方も現在社会への適応が強調されたと考えられます。子どもの教育は早ければ早いほどいいという考え方、教育は人間と人間のつながりの中で行われるのだから、とりまく環境に配慮すべきであり、またできの悪い子どもに対して屈辱感を与えるような叱り方をしてはいけないなどは、閉じられた社会で仲良く過ごす指針であり、現在も参考にすべき教えでしょう。また、
「富貴の家に生まれた子どもは、幼時から世にもてはやされ、人からちやほやされ、万事裕福で気ままになり、世の栄華にばかりふけるくせがついてしまうので、恐れ慎む心がなく、おごりの日々に長じて、遊びごとを好み人の諫めをきらってにくむ」(『和俗童子訓』)として、過保護を諫めています。豊かになった現在の日本の子ども全体に対しても通じるところがあるのではないのでしょうか。
17. 『養生訓』や『楽訓』では、長生きのコツ、老後の生活をどう過ごすべきか等参考になる意見を述べています。前者は健康な生活は心の平安をもたらすとした「心身養生の書」であり、後者は自然に親しむこと、読書を続けることが老後を豊かに過ごすコツであるとしています。この時期、日本においても出版技術が進歩し、読書人口が増加したことも、読書のすすめが容易に受け入れられる素地をつくっていたと思われます。伊勢詣り、金比羅詣りが流行ったのもこの時期からでしょう。また老後の介護については、大家族のなかの家族による温かい介護が好ましいし、家の位置づけが今よりはるかに大きなものでありましたが、その意味では現代よりも住みやすい環境であったとも

言えるでしょう。

18. 「心学」を唱えた石田梅岩も「心をきれいにするには仏法でもよからう。しかし身を修め、家をととのえ、天下国家を治めるには、儒道のほうがよいだろう」(『都鄙問答』)と儒学のすすめを説いていきました。「儉約」と「家業」に精を出すことを説いた梅岩はまた「学問は、行を本」とするという実践を重んじた教えであり、実践的・倫理的な学問即修身でもありました。商人として「商人の道と云ども、何ぞ士農工の道に変わる事あらんや。(中略)商人皆農工とならば、財宝を通ず者なくして、万民の難儀とならん」(同上)として徳川身分制のなかで、はじめて、身分の上下よりも商人の役割の積極的な意味を強調することによって、町人の賤しむべからざるゆえんを説いたのです。しかし、ただ町民のためのイデオロギーを説いたのではなく、士農工商を超えた立場から導き出されており、「儉約」と「家業」を重視した彼の意見は、没落しつつあった武士階級を含めた社会の秩序維持に必要な道義的価値であったために、武士階級にも容易に受け入れられるものでありました。現在中国で、孔子の教えが復活しているのも、社会の安定を考えた時に、儒学はきわめて便利のよい教えであるからではないでしょうか。

19. 梅岩の思想は京都の商家に丁稚奉公した経験から、具体的な教訓が導き出されていただけに、伝播力も強かったし、他方、彼が母の看病中に自らの使命の何たるかを悟ったとする契機、即ち「心は言句を以て伝えられる所にあらず、各人の瞑想工夫によるほかない」という「悟り」が大きな意味を持っていました。そしてそれは鎌倉時代・戦国時代に栄えた禅の流れをも含んでいる。日本人にとって受け入れやすいものであったに違いありません。

20. 梅岩の思想を踏襲した手島堵庵は教化の大衆化を志向し、18世紀後半には堵庵の講席は10倍の人を集め、「心学」の影響は7カ国に広がったといえます。「心学」の対象は、町人ばかりではなく農民にも及びましたし、さらに18世紀末から19世紀はじめにかけて、鳩翁・中沢道二の時代になると、「心学」の隆盛は、69都邑、28カ国に広がり、殊に江戸を中心とする関東5カ国では「旗本・大名の入門者」が踵を接してあられました。19世紀はじめから幕末にかけて「心学」教化運動は、社会のあらゆる階層にわたったのです。

21. こうした学問即修身、「礼」を中心とした「儉約」と「家業」の教えは、寺子屋において単に「読み書き算盤」を教えるためのものではなく、子どもに礼儀をしつけることを第一としても不思議ではありませんでした。「礼儀なき子どもは読み書きを学ぶ資格なし」といわれたのも故なしとしません。

22. 歌舞伎や俳諧の松尾芭蕉、国学で「もののあわれ」を主張した本居宣長などの影響力も考えあわせ、私なりに江戸時代の教育、その背後にある思想を考えてみますと、きわめて、情緒的であり、自然的、没我的であり、儒教を中心としていたとはいえ、神学や仏教も包み込む汎神論の流れが中心であったように思います。また日々の生活の立場から考え出された現実主義的・実践的なものであったようにも思えます。「義理と人情」に代表される情緒的なものは、今もって語り継がれていますが、こうした考えが日本的なものとして江戸時代に純粹培養され、日本人の心の底流に現在も流れているとはいえないでしょうか。

23. 高橋敏は『江戸の教育力』の中でその間の事情をこう記しています。

「読み書きの前に、人として礼儀作法をしつけないといけないという強い使命感があった。朝早起きして顔を洗い、まずお天道様を拝み家のご先祖様を拝み、父母に挨拶の礼をして朝飯を食べ寺子屋に出かける。教場に入るや畳に手を付いて額をさげて心を静め深く礼をしてから席に着く。各自読みと書きの学習を始めるが、ここでは来客への応接、接遇が重視されている。お茶当番(10歳以下は免除)が決められ、煙草盆とお茶をいれて出す。また客人に対する挨拶の礼が一同で行われる。

24. 教場内の秩序も厳しい。大声をあげたり、ぞろぞろ連れ立って大小便、ふらっと抜け出すこと厳禁である。素読中は口を利かず、仕上げは線香2本が燃え尽きるまで復習、手習いはお^{さら}浚いが済んでの清書が重要である。必ず直接師匠に提出し、直しを受けねばならない。師匠の権威は言うまでもない。師匠に^{さら}対面、挨拶もなく帰ることは許されない。必ず一言挨拶してからとなる。筆子(生徒)仲間の友情、助け合いが求められている。10歳を境に年長者と年少者に分け、読み書きや生活面にわたって助け合わせて」いたのです。

25. 「一方、筆子同士の喧嘩・口論は日常茶飯事であったろう。原因は他愛もないお互いの内にあるのであるからいちいち親が取り上げてはならない。筆子の喧嘩に親は口出すな、師匠に任せろ、干渉は許さない。師匠と筆子の師弟関係に親とて介入できない」のがしきたりでした。

26. 「寺子屋の塾則 - 子ども礼式の事」(湯山文右衛門)はその間の事情を伝えています。

- 一. 正座して畳に手をついて額を下げ心静かに一礼して来た順に着席しなさい
- 一. 来客があった時は煙草盆と茶を出し、みな一緒に一礼しなさい
- 一. 来客中は大声で素読しないようにしなさい
- 一. 10歳以下の子どもはお茶番をしなくてよい。11歳から勤めなさい
- 一. 素読が終わったなら線香2本が燃え尽きるまで必ず復習しなさい
- 一. 大便・小便を催した時はぞろぞろ行かないで一人ずつ行きなさい
- 一. 断りなしに教場から出てはならない
- 一. 休業は3月3日から9月9日まで。昼休みは遠くへ行かず近所で行儀よく休憩しなさい
- 一. 友達は兄弟同様であるから仲良く互に行儀を正し末々まで親しく付き合いなさい
- 一. 子ども同士の喧嘩・口論はみな本人が悪いから起こるのであるから親はいちいちとりあげてはならない
- 一. 自分より素読の遅れた者に丁寧に親切に教えてあげなさい
- 一. 10歳から下の子どもに日に一度手を取って書き方を教えてあげなさい
- 一. お師匠さんと対面しないで帰る時は必ず挨拶してからしなさい。家でも朝夕両親へ向かって礼をしてから食事をしなさい
- 一. 朝寝坊しないで起きたら手水で顔を洗いますお天道様を拝みご先祖様を拝みなさい
- 一. 親類・縁者が訪ねて来た時は必ず対応しなさい
- 一. 手習いが終わったなら静かに墨をよく摺って落ち着いて清書に向かいなさい
- 一. 清書が終わった者から一人ずつ提出して直しを受けなさい
- 一. 右のように毎日読み聞かせ必ず礼儀を嗜まなければならない

[コメント]

経済同友会の重鎮で憲法問題委員会の委員長を歴任され、現在は東京都教育委員や漢字検定協会専務理事の要職にお就きの高坂節三先生の教育論。学習塾の原点である江戸時代の寺子屋についての詳細な記述は、とても参考になる。

- 2010年5月29日 林明夫記 -